

上海日本人学校虹橋校における特別活動の実践

前上海日本人学校虹橋校 教諭

岩手県西磐井郡平泉町立平泉小学校 教諭 佐藤 聡 幸

キーワード：在外教育施設、上海、小学校の特別活動、縦割り、委員会活動

1. はじめに

念願が叶い、在外教育施設で働く機会をいただいた。上海日本人学校虹橋校という生徒数1400人を超えるマンモス校で3年間特別活動に携われたことは、非常にありがたい経験となった。ここでは、試行錯誤の中で子どもたちと共に築いた虹橋校の特別活動について紹介したい。

2. 上海日本人学校の実態

(1) 日本人学校の生活について

上海日本人学校は、小学部～高等部まであり、全体を合わせると児童生徒数は軽く3000人を超える。その為、特別に上海東地区の浦東校、西地区の虹橋校の2つの学校で生活を送っている。私が赴任した虹橋校は、小学部のみ約1400人の学校で、半分に分かれているといってもマンモス級の大所帯である。

そんな虹橋校での1日の生活は、朝7時半～8時にかけての登校から始まる。ほとんどの児童が、住んでいるマンションの不動産が準備したバスによって登校をする。それ以外の児童は、保護者とともに徒歩や自家用の送迎での登校である（H27年度からはスクールバスでの登校となっている）。登校後は、日本の学校とほぼ同様のスケジュールで過ごしている。

但し、少し違う点は、人数が多いため校舎が低学年校舎と高学年校舎に分かれており、他学年が何をしているかが分かりづらいという点。休み時間の校庭・体育館の使用割り当てが細かく決まっており、異学年同士が同じ空間で過ごす時間が少ないという点。そしてバス通学のため、下校時間がきっちり決まっており放課後の時間がない点である。

また、授業時間確保のため、クラブ活動や委員会活動は月に1回ずつの活動とやや少なめである。委員会活動では前期6ヶ月を6年生が担当し、後期6ヶ月を5年生が担当するというようにきっちり期間が分かれており、活動を引き継ぐ期間や長期計画での活動が難しいといった現状もあった。

(2) 虹橋校の児童について

虹橋校の児童に感じる1番のことは、とにかく素直でひたむきであるということだった。どんな困難があっても、仲間と支えあいながら乗り越えようとする気持ちがとても強い子どもたちである。また、自分たちでアイデアを出しあい、工夫して進めていくバイタリティにも富んでいる。そして何よりも素敵だと思ったのが、どんな人でもコミュニケーションを通して相手の欠点も知り、理解した上で仲間として付き合っていける点だった。

(3) 上記の実態をふまえて考えたこと

虹橋校に赴任して、強く思い描いたことは「同じ学校で生活する子どもたち、職員、スタッフがひとつになってほしい！」ということ、それから「高学年の子どもたち一人ひとりが学校を引っ張るリーダーとしての責任感とプライドをもち、活動の中で充実感をもってほしい！」ということであった。同じ学校にいながら他学年の活動が見えなかったり、自学年の先生しか知らず、関わりが少ない職員や外国人スタッフは他人といった雰囲気をもったりはしてほしくなかった。また、人数が多い分、高学年の活躍の場が少なくなることで、一部の児童だけが活躍し、他の児童がお客さんのような状態になってほしくなかったのである。

そこで私は、特別活動の中でも「なかよし班活動」と呼んでいる縦割り班活動、そして委員会活動に重点を置き、子どもたちが学校に関わる全ての人と一体感をもてるように、そして高学年の子どもたちが、活動に充実感

をもてるように活動を工夫していこうと心に決めた。

3. 3年間の実践

(1) なかよし班活動

① 特別活動主任としての実践「和」

虹橋校のなかよし班活動は、いわゆる縦割り班活動のことである。

私が赴任した年、虹橋校ではなかよし班活動が始まってまだ2年目で、まだまだ試行錯誤の段階であった。そこから、「5年計画でなかよし班活動を形にしていこう」と、校務分掌の特別活動部の職員を中心に虹橋校にあったなかよし班の在り方を模索し続けた。

赴任2年目、特別活動主任を任命していただき、主となって案を考える立場となった。私の思いは前項で記したとおり、「学校全員の一体感」「高学年の充実感」の2つである。この思いを達成するため、特別活動の年間テーマ「和」を掲げ、一緒にいる時間をたくさん作ろうと考えた。たくさん顔を合わせることで連帯感が生まれる。また、自分たちで考えた活動を実行し、失敗を基に改善するというサイクルを作ることで活動の楽しさも高まり、成功体験も増える。しかし、これを達成するための時間の確保は非常に困難であった。1400人の児童全員が動くとなると大変な時間がかかる。また、各学年学習行事も入っているため、何とか確保できたのが年間10回の昼時間であった。この時間を有効に使い、6年生を送る会では、感動で涙が流れるような関係作りができればと思った。

② 班編制

年間の計画が決まり、次に取り組んだのが班編制であった。6年1組・5年1組・4年1組…が同じグループというように、兄弟学級を組んだ。各学年学級数は異なり、6クラス~10クラスと様々あったが、6年生のクラス数に合わせ、6グループとした。

さらにこのグループを8班に分け、6グループ×8班の合計48班という組織にした。また、6年1組のグループを動物グループ、6年2組グループを食べ物グループ…といったように名前をつけ、動物グループの中の8班にもそれぞれ、ライオン班、トラ班、パンダ班といったようにグループに該当する名前をつけていった。だいたい1班30名程になり、割り当てられた教室で昼の時間を過ごすことになる。外国人スタッフも含め、ほぼ全ての職員にもいずれかの班に所属してもらい、「もう1つの自分のクラス」という意識で班を運営してほしいと話した。

③ 昼の活動

なかよし班のメイン活動となる年10回の昼活動の主な流れは、お弁当と一緒に食べ、6年生の考えてきた遊びをし、感想発表をするというものである。その中でも1年生はいただきます、2年生がごちそうさま、3年生が感想発表、4年生が席順を決める、5年生がお弁当中の話題をふる、6年生全体進行といった役割を設けた。

初回は大いにとまどいが感じられた。6年生の運営がごちそうさなければ子どもたちの反応は素直である。まったく話を聞かず、つまらなそうなのだ。初回の仲良し班から戻ってきた6年生我がクラスの子どもたちも、ほとんどが沈んだ表情をしてもどってきた。「先生、うまくいかなかった…」簡単に反省すると、「役割がはっきりしていなかった。話す声が小さかった。遊びのルール説明が難しかった。急な対応を求められる時、集まってその場で話し合いを始めてしまい、全体の進行が止まってしまった」という課題が挙がった。この反省を基に、次回からは役割を細かく決めて臨むこと、遊びは実際にやってみせるということ、急な対応はリーダーの決定に従い、みんなでそれを支えるように決めた。

このように、毎回出てくる反省を繰り返すうち、だんだんと全班がスムーズに活動を進められるようになった。

④ 運動会での取り組み

なかよし班の実践の中で外せないのが運動会の取り組みである。運動会は虹橋校で間違いなく1番大きなイベントである。虹橋校の全校行事は、始業式、終業式などの儀式的行事の他は、1年生を迎える会、6年生を

送る会、運動会のみで、中でも運動会は子どもたちにとって特に大きな思い出のある行事である。そんな運動会では、特別活動部と体育部の共同作業によって下地を作っていくため、何度も体育部と打ち合わせを重ねながら運動会を計画していった。

平成25年度の虹橋校の運動会テーマは「和」であった。児童会スローガンは「みんなの笑顔が和んだふる！～本気でやるから意味がある～」。そしてテーマソングは「WAになって踊ろう」となった。

このスローガンに向けてまず取り組んだのが、キャップ壁画づくりと掲示用スローガン作り、運動会キャラクターづくりであった。

全校で取り組めるものということで、平成24年度から始まったのがキャップ壁画作りだった。みんなでキャップを集め、全校から募集した運動会イメージイラストの中から選ばれたデザインをキャップで表現していく。この年、全校で集まったキャップは約14000個。休み時間になかよし班ごとに集まってキャップを貼っていき、縦4m×横3mの巨大壁画が完成した。運動会当日、校舎入り口に飾られた壁画の前には、たくさんの記念撮影の列ができていた。

また、並行して進めたのが、巨大スローガン作りである。前述したスローガンを、縦2m×横8mほどの巨大な紙にみんなで色紙を貼り、学校壁面に掲示することにした。この際、テーマ「和」に掛けて、円を勉強した3年生が数千枚の円を描いて切り、スローガンの文字一つひとつを「輪」の色紙で描いてくれた。こちらもキャップ壁画同様、なかよし班での作業をしていった。

運動会キャラクターは、今年で4年目となる取り組みである。子どもたちのアイデアを美術の得意な教師が中心となって具現化した。

そしてこの年の運動会における、なかよし班最大の取り組みが、この年限りの全校チャレンジ、「なかよし班大玉転がし」だった。なかよし班ごとにチームを組み、大玉を転がす。運動会3日前のリハーサル時に全チームのタイムの合計を出し、運動会本番、全チームのタイムの合計が、このタイムを上回ればチャレンジ成功というものである。本番では、見事にリハーサルタイムを2秒上回り、チャレンジを達成した。

(2) 委員会活動

① 委員会活動の組織

虹橋校の委員会は、中央・美化・放送・生活安全・体育・保健・飼育・図書・音楽・情報の10委員会から成っている。第2章1項で述べたが、委員会活動をする上で大変なのが、時間の確保である。虹橋校では委員会が前期、後期それぞれ5回ほどしかない。放課後がないこと、ただでさえ少ない校庭で遊べる時間の確保のため、休み時間もあまり使用したくないこともあり、なるべく少ない時間で活動が学校の役に立ち、充実感もある活動にしたいと考えた。そこで、各委員会には前後期それぞれ日常活動と朝会等や休み時間でのイベント1回を企画してもらおうよう、活動をしばった。

② 子どもたちのアイデアを具現化する教師の力

重ねて記したが委員会活動の時間は少ない。しかし、虹橋校の子どもたちはアイデア満載である。やりたいたいこと、試してみたいことがたくさんあった。そのアイデアを具現化していったのは、各委員会担当教師の努力によるものだった。

数少ない委員会の時間には、とにかくたくさんの意見を出させた。否定的な助言はせず、まずはやってみよ



運動会での特別活動の取り組み

うという姿勢で指導に当たった。各委員会には3~4人の教師がつけるため、それぞれが役割分担をして効果的なサポートを行った。例えば、子どもたちが熱中症対策の劇をしたいとなった際、1人は全体指導に当たり、残りの教師は小道具の準備をしたり、小グループに分けてのシナリオ作りや演技指導をしたりした。また、委員会の時間だけでなく、子どもたちの下校後も熱心に準備作業を行った。子どもたちが集まれる時間の中で無駄が出ないように、できる限りの準備作業をしてから子どもの指導に当たった。

ICTの活用も効果を発揮した。劇などの発表をする際、はじめから通して失敗の内容を指導していくと何度も集まり流れを確認するため時間がかかる。しかし、一部のシナリオはビデオに撮って編集したり、パワーポイントを活用して伝えたいことをまとめたりして、それら予め準備したものに併せて本番の劇をすることで、活動時間が少ない中でも子どもたちのアイデアを実現していくことができた。

このように、担当教師が子どもたちのアイデア実現のために役割分担を明確にし、同時進行で子どもたちが常に100%動ける時間を作っていたことで、少ない時間の中でも充実した活動ができ、子どもたちの中にも達成感をもたせられたのだと思う。

4. 特別活動の成果と課題

(1) なかよし班活動

3章で記したなかよし班活動の結果、子どもたちには明らかな変化があった。例えば廊下で異学年がすれ違った際、同じなかよし班の子や教師の名前を呼んで手を振ったり、運動会へ向けた様々な製作活動の際には、上学年が下学年に優しくサポートをする場面が多くなったりしたことである。なかよし班競技の際には下学年の手を取り、優しく整列させる姿も見られた。また、6年生が修学旅行の際には、1年生からてるてる坊主のプレゼントをもらったり、出発時にはたくさんの学年が外に出て見送りに来てくれたりもした。最後のなかよし班活動の場である6年生を送る会には、寂しさから涙を流す子どもたちも多々いた。

このように、なかよし班活動を通して同じ学校で生活する子どもたち、職員が一体感をより強くもてたのではないかと思う。また、なかよし班活動開始から4年の間に上学年の活動を見て育ってきた子どもたちがスムーズに活動に入れるようになり、下学年への対応もうまくなってきていることも成果ではないかと思う。

今後の課題は、中学年が主体的な活動に取り組めるような工夫をすることで全学年がよりよい集団作りをしていくこと、また運動会時期の活動が多くなり、一部中心となる子どもの負担も増えるため、そちらの負担を軽減することである。

(2) 委員会活動

委員会活動では、日常活動の充実やイベント活動を通して児童の主体性が伸びてきた。また、年2回の代表議会の中でも、各委員会の立場から学校をよりよくするための自治的な意見がたくさん出るようになった。

今後の課題としては、だんだんと教師の支援が少なくし、より一層自分たちの力でアイデアを実現していけるようにすることである。

5. 最後に

虹橋校での3年間の実践で感じた悩みや指導の難しさはたくさんあった。しかし、それ以上に多くの充実感や達成感、そして感動をもらった。それは、私を支えたい多くの協力をしてくれた派遣教員、現地スタッフのおかげである。この場で改めて感謝の気持ちを表したい。

また、虹橋校の子どもたちには、教師としての喜びや人としての温かい気持ちをたくさんもらった。純粹で素直、そしてやる気に満ちた子どもたちと過ごす3年間は、私にとって忘れられない宝物となった。彼らが今後どのように成長し、どんな人生を歩むのか、楽しみで仕方がない。

この記録の中では語りつくせない多くの体験や活動もまだまだあるが、3年間の中で私に関わってくれたすべての方に感謝の気持ちを込めて、この実践記録のまとめとしたい。